

PELDでの後外側アプローチにおける鏡筒の動きに関する検討 Endoscope movement during posterolateral approach

古閑 比佐志、稲波 弘彦

PELDによる腰椎椎間板ヘルニアに対する手術アプローチには、大きく分けて2つの経皮的侵入方法がある。Interlaminarとposterolateral approach (transforaminal, extraforaminalを含む)である。それぞれ椎間板ヘルニアの発生部位によって、最も適した侵入方法が選択されている。椎間孔内及び外側ヘルニアにおいては正中から外側8-14 cm前後に設けた皮膚切開から、posterolateral approachが行われるのが一般的である。手術書には前記のことが記載されてはいるが、その際どのように鏡筒を動かすべきか読み取るとは難しい。また、椎間孔内外にまたがる比較的大きな脱出した髄核に対する侵入及び摘出方法に関して記載した成書はない。そこで本研究では、手術中に記録したC-armの画像と手術動画を継時的に解析し、各手術操作における鏡筒の適切な設置位置に関して検討し報告する。また内視鏡下に「見えるけど取れない」髄核をposterolateral approachで取ろうとする際、ついつい鏡筒を水平あるいは頭側に傾け過ぎてexiting nerve rootを圧排していることがある。これに対して2つの方法でexiting nerve rootの圧排を回避し、尾側にsequestrateした髄核も摘出するように工夫しているので、この手術手技に関する紹介も紹介する。最後に椎間孔内外を占める比較的大きな脱出した髄核の摘出に関して、術中ビデオを供覧し解説する。